

政策金融ファイナンスの国際比較と日本の選択に関する一考察

日本大学 亀谷祥治

グローバリゼーションのひとつの側面は市場主義を経済の規律にすえるものである。この市場経済主義を推進するインフラとしてのファイナンスの分野においても、各国は、政策金融、国によっては、開発金融がいかにあるべきか、国際比較を通してそのファイナンスにおける位置づけを考えているところである。日本においては、財投改革による資金調達手法の市場経済主義へのシフトが始まっており、日本政策投資銀行をはじめとした政策金融機関においてもその運用の選択肢について研究し、実践し始めているところである。以下、今後の考えられる機能、役割を考察し、提言として報告したい。提言は以下のごとくである。

(1) 存在理由は質的補完と量的補完であると考えられる。(2) 質的補完すなわち、市場補完機能に加えて、インフラ整備に民間投資的発想を適用し、政府補完機能も重要であろう。(3) パラダイムとしては、従前どおり、期間補完機能、収益補完機能、リスク補完機能、信用補完機能、資金安定的供給機能、政策的誘導機能、プロジェクト形成支援機能、経営主体形成支援機能が考えられよう。(4) 政策金融の審査結果を民間金融が参考にすることをカウベル効果という。政府が、補助金、政策金融など、目的対効果に応じて複数の政策実現手段の選択肢をもち、かつ、その選択基準を考えることは自然である。加えて、このカウベル効果という言葉が金融の教科書に載って久しいが、民間金融との協調は従来にも増して重要である。(5) 金融による梃子の効果と同様に、政策金融による、プロジェクト形成に際しての触媒機能(カタライザー)はこれも、従来以上に重要であろう。これに似た機能として最近特に地方銀行中心に重視されているのが、リレーションシップバンキングということで、わざわざアメリカにミッションを派遣して研究しているようである。これは日本政策投資銀行などでは従来から守備範囲としているもので、政策金融の機能の一つとして再認識されるべきものであろう。海外の政策金融機関をヒアリングしたところでは、むしろ民間のmatterとしているかのようで、あまり話題にされてはいない。

これらを1例として、政策金融効果をどの様に評価し、国民の、納税者のコンセンサスを形成していくか、政策金融ということを議論するのであるから、国民のコンセンサス形成が重要である。最後に、政策金融のあるべき姿として、質的補完、量的補完、この場合の質的補完機能はいわゆる市場補完機能に加えて、政府機構の補完機能まで延伸して考えてみてはどうかということである。具体的には、審査機能、審査能力、情報生産機能の有効活用、情報の非対称性のクリアを提言したい。